



研究報告
【博物館学】

新しい博物館に向けて ～自然系ソフト事業の開発の一例～ 市民協働による自然史標本の収集と活用

伊達市噴火湾文化研究所 学芸員 羽馬千恵

1. はじめに

伊達市噴火湾文化研究所（以下、研究所）は、市民と共に街の文化を掘り起こし、地域の文化を街づくりに活かそうと様々な活動をしています。何千年もの昔から、伊達という土地に人が暮らし始めて今日に至るまで、人々は、噴火湾を取り巻く自然と密接に関わりながら、独自の文化や歴史を形成してきました。このため、研究所が噴火湾の自然史に関する情報を収集することは、単に地域の生態系や動植物の歴史の変遷を明らかにするだけでなく、人の文化や歴史を理解する上でも欠かせないものです。しかしながら、伊達の自然史記録は、これまで行政規模ではほとんど残されてきませんでした。

当研究所は、主に市の文化財を扱う業務が多いため、研究所の活動に参加している市民は、歴史分野のボランティアが多いのですが、伊達の自然に関心を持ち、毎年、独自の自然観察会などを積極的に展開している自然分野のボランティアも多くいます。

こうした自然分野のボランティアが、地域の自然を学ぼうと、毎年、冬季に主催している「冬の自然勉強会」の場をお借りして、2012年12月16日に自然史標本の作製体験をするワークショップを開催しました。一般の方にはあまり馴染みのない世界ですが、自然史博物館では、収集された動物の死体を標本にし、「自然の証」として展示や研究を行っています。自然史標本といっても植物から動物まで、色々なものがありますが、今回は、野生動物の頭骨標本を一般市民に作製してもらうといった内容で行いました。本稿では、伊達市という地域のもつ魅力を再考しながら、ワークショップの内容を紹介したいと思います。

2. 噴火湾の自然史標本の文化財的価値

そもそも一般の方にはあまり馴染みのない自然史標本には、いったいどのような価値があるのか。伊達という地域の背景とそこに内包する街づくりの可能性とともに考えてみたいと思います。

北海道でも温暖な地域として知られる噴火湾の東岸に位置する伊達市には、国指定史跡北黄金貝塚に代表される縄文文化や有珠モシリ遺跡に代表される続縄文文化に加え、有珠湾沿岸に繰り広げられた中近世のアイヌ文化があります。また、明治期には武

士の移住と開拓の歴史など、多くの歴史遺産を有している街です。

さらに、伊達市は、2009年8月に日本で初めて、世界ジオパークとして認定され、洞爺カルデラや有珠山などに代表される地質遺産を有し、学術的にも観光資源としても多くの見どころがある地域です。



写真1 噴火湾とジオパークに囲まれた伊達市

これまで伊達市では、歴史遺産に関する資料の収集や研究は多くなされてきましたが、歴史や文化の基盤となる地域固有の自然情報の収集はほとんどなされておらず、自然史標本の蓄積は皆無です。

自然史標本は、地域環境の変化など地域の自然の特徴を明らかにするだけでなく、地域の文化とも深く関わっているものです。例えば、伊達市には市の文化財に指定されている記念樹がありますが、いずれも樹齢100年を超える老木であり、樹としての生物学的な価値だけでなく、開拓時期に植えた経緯などの歴史情報も併せ持っています。また、東日本大震災で被災し、ふるさとの記憶が復興の力になるとの願いも込めて救出された自然史標本の中には、単に過去の東北地方の自然環境を示すだけでなく、人間社会を含んだ「地域文化」の記録を示す資料が多く救出され、標本は学術的価値のみならず、文化財的価値をもっていることが改めて明らかとなっています（佐久間 2011）。

こうしたことから、自然の記録を収集することは、これまで伊達市で多くの情報が蓄積されてきた考古学や歴史学との関連性も深く、こうした他分野

との学際的研究にも寄与するものです。実際、考古学の分野では、遺跡から出土する多くの動物骨を同定する際、現生の動物標本が不可欠であり、一方で、動物学の分野においても、出土した動物骨は、過去にその動物が生息していたという絶対的な証拠となることから、自然史の解明にも役立つものであり、考古学と動物学は相補的な関係にある分野なのです。こうしたことから、すでに伊達市で開拓されている地質遺産や歴史遺産などの観光資源に、自然遺産の知見を加えることは、地域の魅力をより強化し、地域活性化にもつながるものと考えています。

さらに、近年は、学校教育の現場においても、本物の骨や化石などの標本を実際に触れながら学習を行う教育が全国的に展開されてきており、博物館の中での活用だけでなく、地域の資源として多様な活用が期待できます。

日本の自然史標本は、国の法律や地方の文化財保護条例でも、ほとんど保護される対象になっておらず、対象の多くは野外の巨木や天然記念物です（佐久間 2011）。伊達市の文化財保護条例もこの例外ではなく、これまで伊達市では自然史情報を残すという下地がありませんでした。

3. ワークショップの開催

伊達市で自然情報を残す体制づくりの第一歩として、2012年12月16日にワークショップ『動物の頭骨標本を作ろう！』を開催しました。参加者には事前に本講座の目的と頭骨標本の作製方法、感染症や鳥獣に関する留意点について説明を行った上で、実験室にて標本作りを行いました。

本講座の周知は、研究所ホームページや市の広報誌などで行い、定員10名の事前申込み制としました。これは、実験室のスペースと資料の数に限りがあったためです。初めて実施する講座であるため、市民がどのくらい関心をもって申し込んでくれるか、不安もありましたが、定員以上の応募があり、当日は見学者を含めて37名での実施となりました（写真2）。

事前に申し込みのあった参加者は、幼児3名（親子で参加）、市内の高校生3名、20代から70代までの一般成人11名と幅広い年齢層で、これまで研究所に関わりのあった方だけでなく、市の文化行政に関心のなかった新規参加者も多く見られました（写真3）。

頭骨標本の作り方には色々な方法がありますが、今回は、皮を剥いだ頭部を煮沸し、肉を骨から取り除く方法を用いました（詳しくは『標本の作り方ー自然を記録に残そう』（大阪市立自然史博物館編著）などを参照）。

使用した動物の頭部は、市内などで有害駆除により捕獲され殺処分されたヒグマ、エゾシカ、アライグマ、タヌキといった野生動物に加え、市内の精肉販売会社オオヤミートから提供されたブタを用いました。

感染症のリスクを考慮し、体験者には研究所が用意したマスク・手袋・白衣着用をのものと、ヒグマを除いて、使用した頭部は、スタッフにより事前に煮沸処理したものを用いました。体験者は、ピンセットなどで肉を取り除いた後、細かい肉片を取り除くために歯ブラシで骨を洗う作業を行いました（写真4）。



写真2 ワークショップ会場のようす



写真3 幼児の参加ーブタの頭骨処置を行っているー



写真4 歯ブラシで骨を水洗いしている親子